

平成 28 年度卒業研究
ポオの作品における動物の象徴性

宮脇 千里

概要

Edgar Allan Poe (1809-1849) はアメリカを代表する小説家であり、詩人である。もう 32 年後にはポオの死後 200 年経つこととなるが、その存在は薄れることなく、ポオの作品を鑑賞するのみにとどまらず多くのジャンルを横断して親しまれている。彼の作品や人生そのものは、死後かなり経つ今もなお映画、音楽、絵画などにおいて題材として使用されている。

この論文において私が着目した動物というモチーフは、古今東西を問わず多くの文学作品に登場してきた。ポオも度々、自身の作品において動物を用いた。ただの動物ではなく、人の言葉を話す鳥 (“The Raven”) や、殺人を犯すオランウータン (“The Murders in the Rue Morgue”)、一度死んだ登場人物の生まれ変わりとして現れる馬 (“Metzengerstein”) など、それらは私達が日ごろ接する動物とは異なる性質を持つ。ポオが用いたこれらの動物に関して、主に「なぜその動物を題材に選んだのか？」の問いを中心に据えて論じたが、この問いを解くにはポオがそれぞれの動物という題材に何を求めたのかを考える必要があった。つまり「なぜその動物なのか？」を問うことは黒猫、馬、オランウータン、カラスとオウム、これらの動物は何の表象であるかを問うことでもある。そしてその問いについて考察する手段として彼自身による評論 “The Philosophy of Composition” (1856) を使用した。この評論はポオの詩作品 “The Raven” (1845) の創作過程を事細かにつづったもので、その中で “The Raven” においてなぜ “raven” という動物を用いたのかという話題について触れている。

第一章では “The Black Cat” (1843) について「なぜ黒猫なのか」を考察する。ポオの詩作 “The Raven” に関する論文にて岩瀬は「ポーを根源的に創造へと衝き動かすヴィジョンの一つは、整然と秩序立てられていた世界が、外から侵入する混沌の力によって破壊されるというものである」(13) と述べた。この「整然と秩序立てられた世界」と「混沌の力による破滅」という構図は “The Black Cat” においても見られる。動物に対する残虐な行為を、アメリカの当時の精神医学における先駆者であった Benjamin Rush (1745-1813) は人間のモラルに影響を与える要因には食事や睡眠などがあり、動物への虐待もその要因の一つとしてあげられるとし、動物への虐待は人間の精神の機能ひいてはモラルを破壊するとして批判したのである。すなわち語り手による黒猫への残虐行為は非理性の象徴であり、崩壊の過程でもある。

このことから “The Black Cat” に登場する二匹の黒猫を、語り手の世界を破滅へと導く混沌の力と考えた。そして「なぜ黒猫なのか」という問いへの答えとしてはまず、第一章にて議論の中心とした「整然と秩序立てられた世界が、混沌の力によって破壊される」というヴィジョンに黒猫が最も即しているからである。この作品には黒猫の他にも小鳥、金

魚、犬、うさぎ、小猿が語り手のペットとして登場するが、どの動物よりも黒猫は不吉なイメージを持ち、破壊や破滅、崩壊といった不吉なヴィジョンに即しているのだ。さらに、猫という動物は人間の生活に容易に入り込むことができる。語り手の生活に忍び込み、内側から彼の世界を崩壊へと導く役割を果たすのに丁度良い題材なのであった。

第二章では“Metzengerstein”（1832）を取り上げた。Frederic は宿敵の焼死と同時に現れる炎の色をした馬に奇妙な因縁を感じ、悪意を持ってその馬を飼い慣らす。Frederic はやがて昼夜を問わず馬と共に過ごすようになり、その異常な執着は周囲の人々に恐ろしいほど以上に映った。ある晩 Frederic の持つ宮殿が火災に見舞われ、そこへ Frederic が件の馬に乗ったまま飛び込んで焼死し、物語は終わる。この物語において鍵を握っているのが「馬」という動物である。馬と人、そして焼死の反復がなされている。反復の効果についてポオは“The Philosophy of Composition”において次のように述べている。“The pleasure is deduced solely from the sense of identity — of repetition.” 同じ事が繰り返されることによって快感というものは生まれる。“refrain”にはそういった快感を生み出す効果があるということもポオは理解していた。そのため“The Raven”において“Nevermore”という単語が“refrain”として何度も使用され、単語はそのままに、毎回異なるシチュエーションが用意された。“Metzengerstein”においても同様に、シチュエーションに変化を持たせつつ馬と人、焼死のセットが反復されているのであった。反復に関連して、宿敵が焼死し馬へと“Metempsychosis”をなすことについても述べた。ストーリー上の“refrain”同様に焼死した宿敵の魂が馬へと転生することもまた、ある種の反復と呼べよう。そして魂の転生というのもまたポオが使用したアイデアのひとつであるということ、アメリカの文学者 Mabbott（1898-1968）が“transmigration of souls”と表現し述べている。

“Metzengerstein”は反復をなすことでストーリーが進んでゆき、その反復には常に馬が関係している。Frederick は宿敵の死と入れ替わりに現れた馬にのめりこみ、近隣の貴族から孤立する。それゆえに Frederick と馬の間に奇妙な絆が生まれる。Frederick と馬の絆が深まり、異常な執着まで発展することが彼の焼死へ繋がってゆく。Frederick と馬の関係性の深さによって、これまで述べてきた反復の関係が成立した。「なぜ馬なのか」。この作品の中で起こる火事、馬、人の死の反復は、他の動物では成立させることができないというのが問いに対する結論である。

第三章では“The Murders in the Rue Morgue”（1841）を扱った。この作品は難解な母娘惨殺事件の犯人を、目撃者の証言をもとに登場人物 Dupin が推理する物語で、世界初の探偵小説という位置づけにある。オランウータンが殺人犯という重要な役割を担っているが、母娘惨殺の犯人として他の動物ではなくオランウータンを選んだのはなぜなのか？

まずオランウータンを題材として選んだ背景のひとつには、斬新さを求める読者の期待に沿おうという意識があったのだと考えられる。野口によれば「1840年代のアメリカでは、オランウータンの生息や実態はまだあまり知られていなかった」（120）のである。

次に、この作品でポオはオランウータンを使い「意味づけ不能な闇の力」を示そうとし

たという考えをもとに論じた。“The Murders in the Rue Morgue”におけるオランウータンは、殺人現場の描写と、その殺人の過程を推理した Dupin の言葉、どの部分を抜き出しても特に凶暴性が強調されている。本文中で Dupin はフランスに実在した動物学者ジョルジュ・キュヴィエ (1769-1863) の名を持ち出し、キュヴィエによるオランウータンの紹介を推理材料として使用した。本文中のオランウータン像はキュヴィエの実際の紹介文とは大きく異なるものであった。キュヴィエが自身の著作『動物界』にて述べたオランウータン像は「若い、しかも檻のなかにいるオランウータンは、たやすく手なずけ、仲良くなれる。だがその知能は、報告されているほど高いものではなくて、犬の知能を大きく超えることがない」(井上 31) とされ、それほど賢くはなく非常に優しい動物である、との紹介であった。対して “The Murders in the Rue Morgue” に登場するオランウータンは、キュヴィエの紹介したオランウータンとは真逆の性質を持っていた。凶暴性を強調することで、当時の動物学者の紹介で温和とされていたはずのオランウータンは、「意味づけ不能な闇の力」の表象としてのオランウータンとなる。キュヴィエの紹介と真逆の性質を持たせ残酷な殺人犯として設定することで、第三章ではオランウータンに「意味づけ不能な闇の力」を表現しようとした、と結論付けた。

最後に第四章では “The Raven” (1845) と “Romance” (1829)、二編の詩を取り上げた。“The Raven” に関して「なぜ “raven” なのか？」という問いについての答えは、これまでの章でも何度か言及してきた “The Philosophy of Composition” にて詳細が述べられている。それによると、“The Raven” において動物を用いたのは “Nevermore” という単語の反復に口実が必要であったからであり、理性のあるものにその反復を行わせるのは不自然であるため、理性をもたない動物を選んだという明確な理由が記されている。従って第四章ではここまでの章と同じ問いではなく、論点を変えて、先ほど示した “Romance” と “The Raven” の二作品を、その対照性、共通点などを問題にしつつ比較考察してゆくこととした。

対照性として一点目は象徴性、二点目は空間の限定性、三点目はそれぞれの「鳥」の導入について、四点目は作中における「鳥」の動きかたについて論じた。特に「鳥」の導入に関して、“raven” は “I” の閉ざされた空間へと侵入してくる。第一章に述べてあるが、“raven” は「外から侵入する混沌の力」(岩瀬 13) の象徴である。反対に、“Romance” の第一連のオウムは最初から “I” と同じ空間に存在している。“raven” とは異なり、このオウムは “I” の「整然と秩序立てられていた世界」(岩瀬 13) を構成するひとつの要素として存在する。侵入者としての役割を持つ “raven” に対して、元から “I” と同じ空間に存在していた “parquet” というのが「鳥」の導入に関する対照性である。しかし “Romance” にも “The Raven” 同様の侵入者的役割を果たす「鳥」も登場するということを示すために、もう一遍の詩 “Sonnet — to Science” (1829) を参照した。“Romance” と “Sonnet — to Science” の 2 作品における「コンドル」について、重松は「彼の青年時代に表現されたコンドルとは彼の幸福なる少年時代をうばってしまう非常なる現実を象徴している」(122)

と述べている。そして各詩に登場する鳥について “raven” と “parquet”, “Condor” について、“raven” と “parquet” は非理性対理性という対照的な存在であり、“raven” と “Condor” は侵入者であり幸福を奪う非常な現実の象徴であるという共通点を持つ存在であると述べた。

最終的にポオが動物を題材にしたのはその必要性からであると結論付けた。その作品を通して読者に表現したい効果が先にあり、その効果を出すに適した題材を模索した。そのように作品を構成してゆき、ある作品では「群衆」を (“The Man of the Crowd,” 1840)、また別の作品では「美女の死」を (“The Mystery of Marie Roget,” 1842)、そして本稿で扱った作品群においては「動物」という題材を選んだ。

参考文献

- Mabbot, Thomas Ollive. *Collected Works of Edgar Allan Poe*. Vol. 2, Belknap Press, 1978.
- Poe, Edgar Allan. “The Black Cat.” *Selected Writings of Edgar Allan Poe*. Penguin, 1967, pp. 320-329.
- … “The Imp of the Perverse.” Poe, *Tales of Mystery and Imagination*, pp. 361-366.
- … “Metzengerstein.” Poe, *Tales of Mystery and Imagination*, pp. 213-21.
- … “The Murders in the Rue Morgue.” Poe, *Tales of Mystery and Imagination*, pp. 378-410.
- … “The Philosophy of Composition.” Poe, *Poems*, pp. 211-225.
- … *The Poems of Edgar Allan Poe*. G. Bell, 1970.
- … “The Raven.” Poe, *Poems*, pp. 3-12.
- … “Romance.” Poe, *Poems*, p. 114.
- … *Tales of Mystery and Imagination*. J.M. Dent, 1908.
- 井上健、「パリのオランウータンとキュヴィエーポーの動物表象と「探偵小説」の成立」、辻本・福岡、17-42 頁。
- 岩瀬悉有「エドガー・アラン・ポーの「大鴉」—崩壊する理性のふるえ—」、『関西福祉科学大学紀要』10 巻、2007 年、11-17 頁。
- 乙須翼、「18 世紀末フィラデルフィアの娯楽批判—社会改革を支える諸価値の創出—」、『長崎国際大学論叢』10 巻、2010 年、1-12 頁。
- 小原文衛、「“Metzengerstein”は悲しまない—E. A. ポオと〈ファントム〉の詩学」、『中部アメリカ文学』4 号、2001 年、1-12 頁。
- 佐渡谷重信、「萩原朔太郎と Edgar Allan Poe：特に「鶏」と「大鴉」の Vision について」、『西南学院大学英語英文学論集』21 号、1981 年、19-41 頁。
- 重松卓未、「Edgar Allan Poe：Romance をめぐって」、『甲南女子大学研究紀要』4 号、1968 年、115 - 127 頁。

辻本庸子、「まえがき」、辻本・福岡、5・13頁。

辻本庸子・福岡和子編、『あめりか いきものがたり—動物表象を読み解く』、臨川書店、2013年。

野口啓子『後ろから読むエドガー・アラン・ポー —反動とカラクリの文学』、彩流社、2007年。

ポー、エドガー・アラン『ポオ 詩と詩論』、福永武彦他訳、東京創元社、1979年。

宮永孝『文壇の異端者 エドガー・アラン・ポーの生涯』、新門社、1979年。